



# 館蔵近代絵画展

- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 平成20年11月12日(水)～1月12日(月)
- 休館日 12月8日(月)・9日(火)  
12月28日(日)～1月4日(日)

今回のテーマ展では、幕末から明治時代を中心に福井の絵師達と西洋画の影響を受けた肖像画をご紹介します。江戸時代は多くの絵師が活躍した時代です。江戸時代中頃から画壇の中心にいた狩野派が形式化していく一方で、町絵師や絵を得意とした武士等セミプロ達が活躍していました。福井でも江戸時代の中頃から狩野派の作品はあまり確認することができませんが、町絵師や絵を得意とした(元)武士達の絵画が江戸時代だけでなく明治以降も多く遺されています。

また、江戸時代後期から日本には少しずつ西洋文化が伝えられ、開国後は一気に押し寄せました。その中には西洋画も含まれていました。人々は伝統的な日本絵画や東洋美術とは異なる西洋画の写実表現に、新鮮な驚きと大きな衝撃を受けたようです。西洋画は幕府や藩、明治政府、知識人によって西洋の科学・技術の一つとして研究・利用が進められ、一方浮世絵等には遠近法などが部分的に取り入れられています。福井では16代藩主松平春嶽が西洋の知識取得に積極的で、藩校でも西洋の科学・知識が学習されました。明治になるとグリフィスなどお雇い外国人教師による教育も行われています。当館には明治期の写真や肖像画が多く遺されていますが、このことが背景の一つと思われます。

新しい技術、知識が怒涛のように押し寄せ、現在とは異なる価値観の中で生まれた作品をご覧ください。

## 1 幕末から明治の福井の絵師たち

明治になると江戸時代の画壇を支配していた狩野派はその支持基盤であった幕藩体制の崩壊により衰えていきました。福井では、江戸時代中期頃からお抱え絵師である狩野派の制作活動があまり活発ではありませんでした。しかし、絵が得意な藩士や町絵師たちの作品が多く残されており、その絵画制作は明治以降も続いています。特に、幕末の福井藩士で絵を得意とした島田雪谷の二人の子・雪湖しまたせつこと墨仙ぼくせんは父に絵を学び、中央画壇でも活躍しています。また、明治新政府の役人たちが文人画を愛好したことから、文人画家たちは活動を広げました。福井でも内海吉堂うちみきちどう、長田雲堂ながたうんどう、山田介堂やまだかいどうが活躍し「越前三堂」とよばれました。



桜下群鳥図 島田雪谷筆  
福井市春嶽公記念文庫

## 2 肖像画と洋画

当館に遺された明治以降の肖像画には、写真をもとに描かれたことが明らかな作品が多く、中には油絵で描かれたものも残されています。当時、写真技術はまだ未熟で白黒のみ、長期保存も難しく、引き伸ばすこともできませんでした。そこで、むしろ「記録」のためには色や質感、写実表現に優れ、画面の大きさが自由自在な西洋画(油絵)のほうが有効だと考えられました。そのため、幕末から明治初め頃、西洋画はモノを「そのまま」「そっくり」に描くことに重点が置かれ、西洋画は社会に有益な「技術」と考えられていたのです。洋画が創造性、「美」を表現するものと認識されるには、明治9年(1876)にイタリア絵画界でも高く評価されていたフォンタネージの東京の工部美術学校教師就任、その後の日本人洋画家や社会の意識の進展を待たなくてはなりません。当館所蔵の肖像画と写真からは、現在とは異なる明治前半期の写真と絵画の関係、価値を窺うことができます。



松平春嶽像 佐々木長淳・三六筆 明治17年(1884) 福井市春嶽公記念文庫



### 3 高橋由一筆「真崎稻荷社図」—日本洋画の基盤を築いた明治洋画の巨匠—

高橋由一(文政11~明治27年・1828~94)は幕末から明治時代に活躍した洋画家です。下野国佐野藩の藩士の家に生まれ、西洋文化に関心の高かった藩主堀田正衡の近習を勤めました。幼少の頃から絵を学んでいましたが、あるとき見た西洋石版画に魅せられ洋画学習を熱望、ようやく35歳のときに念願叶い蕃書調所画学局へ入り西洋画学習をはじめることができました。その後、日本に駐留していたイギリスの報道画家ワーグマンや工部美術学校のイタリア人教師フォンタネージから本格的に西洋画を学びました。明治6年(1873)には洋画塾天絵楼(後に天絵学舎と改称)を設立、作品の発表と後進の洋画家育成に努めました。内国勸業博覧会やパリ万国博覧会にも出展し、元老院の依頼により明治天皇像も描くなど、当時から洋画家を代表する画家と考えられていたことがうかがわれます。また、明治14年からは大規模土木工事で大きく変容した東北地方の風景画を描いています。対象を凝視し迫った由一の油絵は単なる「技術」を超え、日本の洋画の礎を築いたと高く評価されています。

右の絵は、最後の将軍徳川慶喜が描いたものとして松平家に伝えられていました。しかし、この絵はほかの慶喜の油絵と比べて優れた技術、的確な遠近法で描かれていること、類似したモチーフ、構図をもった由一の作品が残されていること、木の葉など細部の描法も由一作品と共通していることから近年の研究では高橋由一がフォンタネージに師事する明治9年以前に描かれた可能性が指摘されています。

真崎稻荷社図 高橋由一  
福井市春嶽公記念文庫蔵



## 展示品目録

	作品名	作者	法量	材質	員数	所蔵	備考
1	山水図	成見如山	138.0×30.0	紙本淡彩	1幅	春文	
2	韓信股潜り図	早瀬来山	136.0×61.0	紙本淡彩	1幅	春文	
3	不老長春図	河野菱渚	135.5×60.0	紙本着色	1幅	春文	
4	桜下群禽図	島田雪谷	171.5×96.0	紙本着色	1幅	春文	
5	山水図	島田雪湖	175.0×96.0	紙本着色	1幅	春文	
6	加藤清正像	島田墨仙	131.0×50.0	絹本着色	1幅	当館所蔵	昭和14年(1940)
7	双鳥に鯉図	内海吉堂	134.0×48.0	紙本着色	1幅	当館所蔵	明治18年(1885)
8	山水図	長田雲堂	110.0×43.0	絹本墨画	1幅	当館所蔵	
9	雨気薫々図	山田介堂	137.0×33.5	紙本墨画	1幅	当館所蔵	
10	半井仲庵像	山田シゲアキ	62.5×44.0	油彩キャンバス	1枚	個人蔵・当館寄託	明治7年(1874)
11	松平春嶽筆半井仲庵画賛		51.0×37.0	絹本墨書	1枚	個人蔵・当館寄託	明治7~8年(1874~1875)
12	中根雪江釣姿像	亀井竹二郎	55.0×36.0	油彩キャンバス	1枚	個人蔵・当館寄託	明治10年(1877)
参考資料	中根雪江釣姿肖像写真			写真		春文	明治2年(1869)
13	松平春嶽像	佐々木長淳・三六	70.0×50.0	油彩キャンバス	1枚	春文	明治17年(1884)
参考資料	松平春嶽肖像写真			写真		春文	明治17年(1884)
14	松平春嶽像	波々伯部捨四郎	112.1×40.2	絹本着色	1幅	越葵文庫	明治25年頃(1892)
参考資料	松平春嶽肖像写真			写真		春文	明治17年(1884)
15	勇姫像	佐野常成	62.5×53.7	油彩キャンバス	1枚	当館所蔵	明治20年(1887)
参考資料	勇姫肖像写真			写真		春文	明治18・19年頃(1885・86)
16	真崎稻荷社図	高橋由一	51.0×87.0	油彩キャンバス	1枚	春文	明治6~7年頃か(1873~74)

※資料保護のため、展示品が入れ替わることがあります。

春文：福井市春嶽公記念文庫

## 🌳 次回の展示

テーマ展「館蔵絵図展」 1月16日(金)~3月16日(月)

## 福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話(0776)21-0489 FAX(0776)21-1489

担当 藤原千穂

制作/創文堂印刷株式会社(0776)22-1313